

死後の世界 第二部 人は死んだら、どこへ行くのか
第1章 肉体の死後、人の霊魂はどこへ行くのか

この学び全体のアウトライン

第一部 死とは何か

- 第1章 人の構造
- 第2章 死についての聖書的理解
- 第3章 非物質的部分【霊魂】の不滅

第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

- 第1章 肉体の死後、人の霊魂はどこへ行くのか
- 第2章 復活までの中間的状态

第三部 死者の復活

- 第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】
- 第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】
- 第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】
- 第4章 王国の後【不信者の（第二の）復活、不信者は第二の死へ】

第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

第一部の内容

1. 第一部第1章：人の構造
 - (1) 人は物質的部分である「からだ」と非物質的部分である「霊魂」とから成る
 - (2) 霊魂は、「霊・魂・心・思考・意志・良心」の6つの要素と 墮落によって入り込んだ罪の性質である「肉」、合計7つの要素から成る
2. 第2章：死についての聖書的理解
 - (1) 肉体の死とは、人の非物質的部分である「霊魂」が肉体から分離することである
 - (2) 肉体の死のほか、霊的な死と永遠の死がある
 - ① 霊的な死とは、神からの一時的な分離
 - ② 永遠の死とは、神からの永遠の分離
 - (3) このように聖書が教える死の特徴は、「分離」である。消滅とか、意識がなくなることではない。
 - (4) 死は、罪に対するさばきであり、良いことではない。神は、3つの死のうち2つ、肉体の死と霊的な死については、解決策を用意しておられる。
 - ① 肉体の死については、復活。霊魂が再びからだと結合される。そのときの体は、不死である。信者も不信者も、すべての人がこれを受け取る。
 - ② 霊的な死については、信仰による霊的な再生。神の恵みにより信仰を通して、罪の贖いを受け取ると、人は神の子とされ、神との交わりが回復される。そして、新しい性質がその人の霊魂に与えられ、6つの要素が日々新たにされる。
 - (5) 永遠の死については、解決策はない。不信者は、不死のからだを受け取ったのち、

永遠に神から分離された場所に行くことになる。

3. 第3章：霊魂の不滅

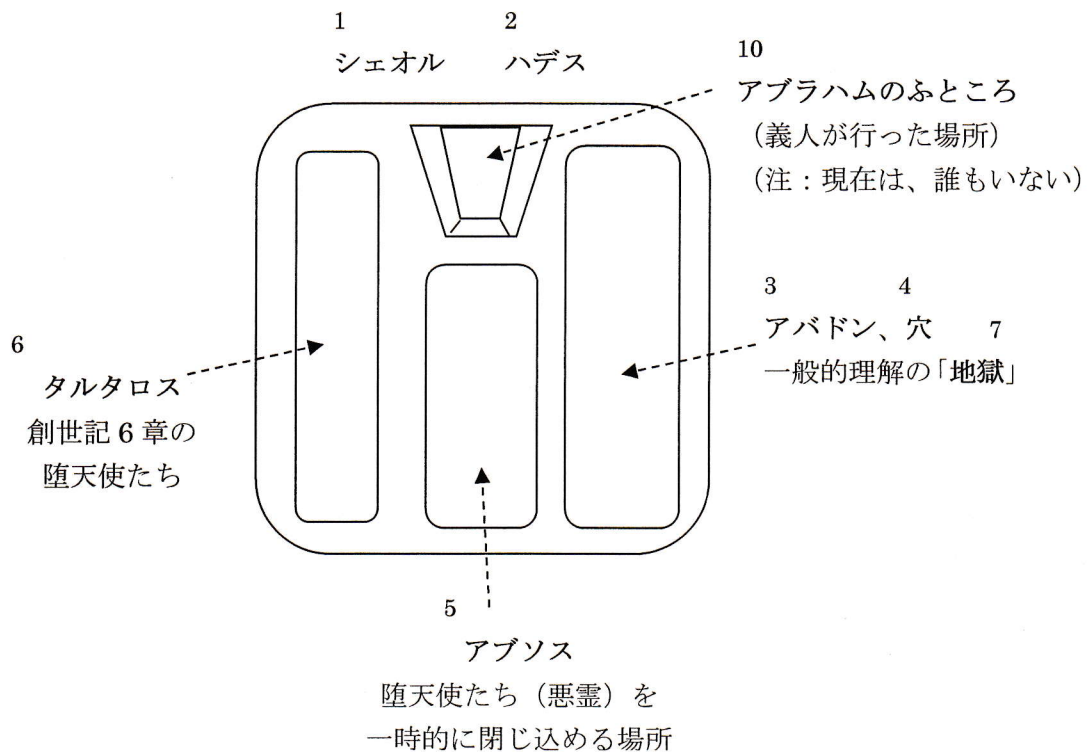
肉体の死によってからだから分離した霊魂は、消滅したり、意識がなくなるのではなく、不滅であり、その人の意識は明瞭に継続する。

では、肉体を離れた霊魂はどこに行くのか。これが、第二部第1章のテーマである。フルクテンバウム博士の論文「The Place of the Dead（死者の場所）」に基づく。

第二部第1章のアウトライン

1. 目に見えない世界を指す用語
2. 旧約時代における死者の行先
3. メシア昇天以降の現代における死者の行先
4. 将来における死者の行先

1. 目に見えない世界を指す用語【13語、「地獄」を除いて12の用語は聖書に中にある】



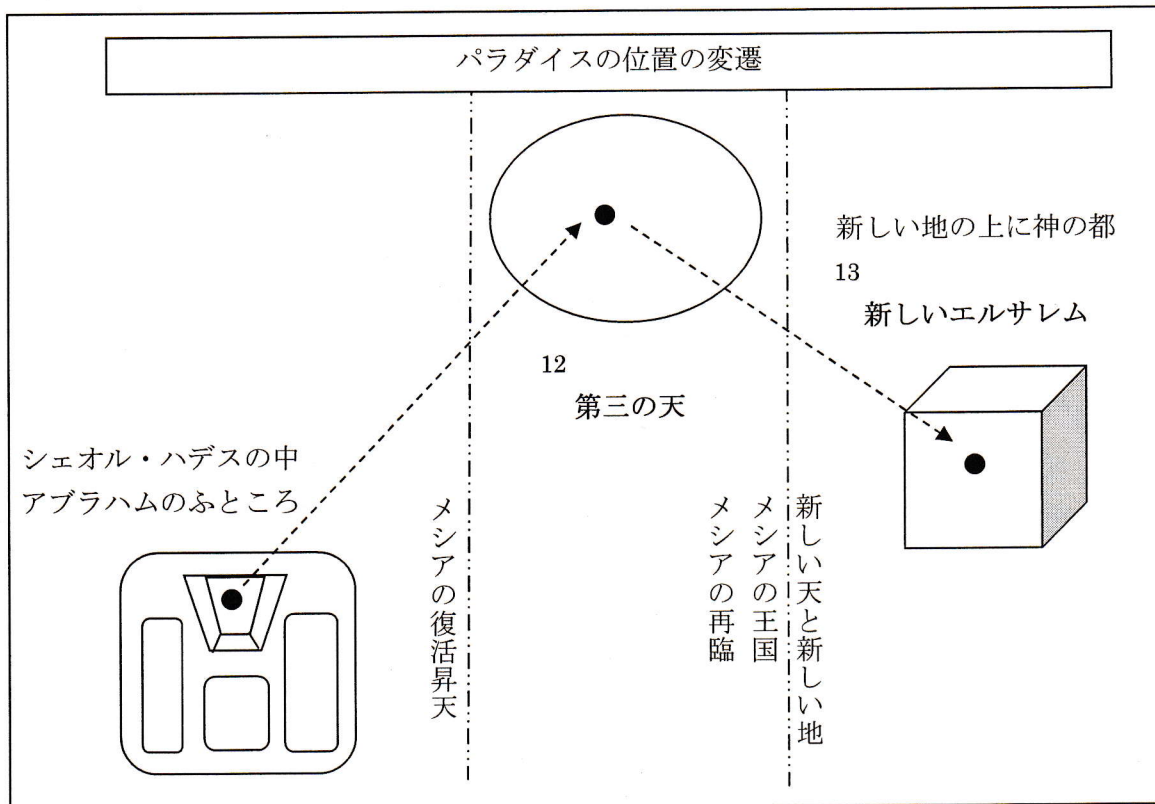
⁸ ゲヘナ は、☐シェオル☐ハデスと呼ばれる場所とは、別である。
 霊魂だけでなく、からだも持って、永遠の刑罰を受ける場所である。
 本来は、サタンと墮天使たち（悪霊たち）のために用意された場所である。

⁹ 火の池 は、ゲヘナと同じものである。

11

パラダイスは、時期によりその位置を変えるが、常にその場所は義人たちのための場所である。メシアが昇天したときに、旧約の義人たちは第三の天の中に移された。その結果、パラダイスは、今、第三の天の中にある。

*ハデスの中にあった「アブラハムのふところ」には、今は、誰もいない。空っぽである。



シェオルまたハデスは、どうなるか

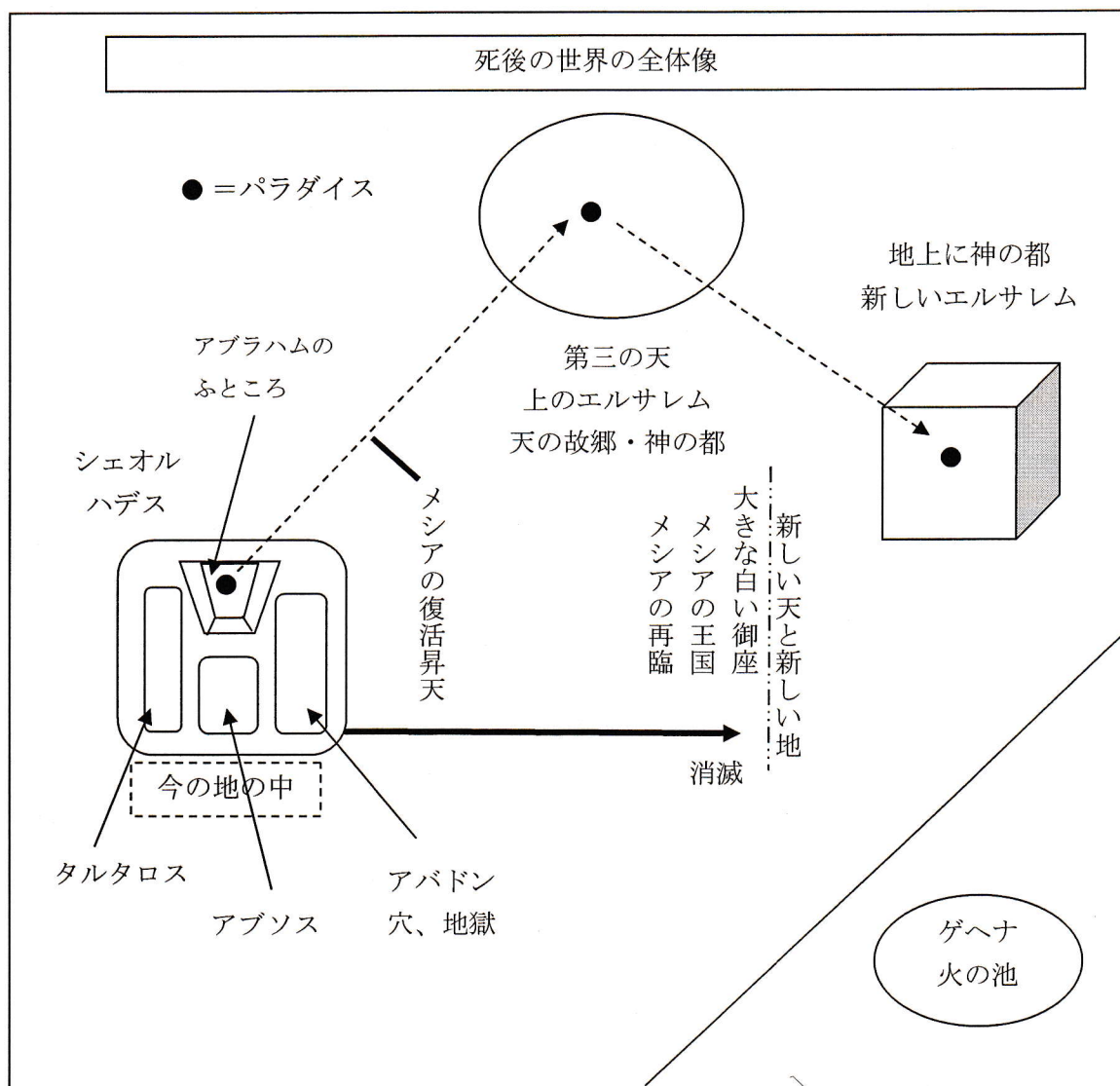
その場所は、地の下の部分、地の中にある。・・・地下の国（エゼ 26 : 20、31 : 14、16、18、32 : 18、24）、地の低い所（エペ 4 : 9）、地の中（マタ 12 : 40）

今の地は、メシア王国の後に消失する（黙 20 : 11、21 : 1）。よって、地の中にあるシェオルまたハデスも、そのときに一緒に消失する。シェオルまたハデスは永遠に存在するものでなく、一時的なものである。

天（第三の天）と新しいエルサレムとの関係

天は、神のみ住まいである。また聖なる天使たちのいる場所である。そして、肉体の死を経た聖徒たちがいる場所である。パラダイスは、今は、天にある。以前、パラダイスは、地の中に、アブラハムのふところにあった。しかし、今は、天にある。

天は新しいエルサレムとも同じである、あるいは、新しいエルサレムは天にある、とも言える。新しいエルサレムは、新天新地において地上に立つ。これが、アブラハム、イサク、ヤコブがあこがれた「天の故郷、神の都」である（ヘブ 11 : 16）



■旧約時代における死者の行先

1. 信者 → シェオルまたハデスの中の「アブラハムのふところ」。義人が行く場所であり、慰めの場所である（ルカ 16 : 25）。
2. 不信者 → シェオルまたハデスの中の「アバドン、穴」と呼ばれる場所へ。
 - (1) ハデスの中の苦しみ場所である（ルカ 16 : 23～24、28）。
 - (2) 不信者にとっては、「ハデス」と言えば、この苦しみ場所である。神学では「ハデスの中のハデス」、「狭義のハデス」とも呼ぶ。
 - (3) 一般の人々が「地獄」として理解しているのはこの場所である。そのため、シェオルやハデスを「地獄」や「よみ」と訳すことがあるが、聖書が教えるシェオルまたハデスは、不信者が行く苦しみ場所だけではなく、信者が行く慰めの場所や墮天使を閉じ込めておく場所を含むことに注意しよう。

■メシア昇天以降の現代における死者の行先

1. メシアのみわざ
 - (1) メシアの死・・・メシアは、すべての人の罪のために死んだ（ヨハ 3 : 16、I テモ 2 : 4～6、テト 2 : 11）。旧約の信者たちの罪もまた、メシアの死によって取り除かれた（ヘブ 9 : 26、10 : 1～18）。→ 捕らわれていた信者たちを解放する代価が払われた。
 - (2) メシアがシェオルに下る・・・メシアは地の中に下った（マタイ 12 : 40）。そこは地の下の部分、低い所であった（エペソ 4 : 9）。そこは、パラダイスであった（ルカ 23 : 43）、すなわち義人の行く場所、アブラハムのふところであった。
 - (3) メシアの昇天・・・メシアが天に上ったとき、アブラハムのふところにいた旧約時代の信者たちをみな伴って上った。（エペソ 4 : 8～10）。「彼は多くの捕虜を引き連れ」（8 節）、多くの捕虜とは旧約の信者たちである。
2. メシアの昇天以後は、パラダイスは天にある。メシアの死により、信者はもはや、肉体の死後にシェオルまたハデスに下って「捕虜」になる必要はない。信者の霊魂の行先は、天のパラダイスである。信者は死ぬとその瞬間、その霊魂は神の臨在の中に入る。
3. 不信者については、旧約時代と同じである。「ハデスの中のハデス」、「地獄」に下る。

■将来における死者の行先

1. 信者

- (1) 不死のからだ（栄光の体）を受けて、メシアの王国（千年間）に入る。
- (2) メシアの王国が終わると、新しい天と新しい地（永遠の世界）へ入る。

2. 不信者

- (1) メシアの王国が終わるまで、ハデスの中にとどまる。
- (2) メシアの王国が終わると、不死のからだ（不信者の場合は、神の栄光を受けることがないので、「栄光の体」とは呼ばない）によみがえり（ヨハ 5：29）、「大きな白い御座のさばき」を受ける（黙 20：11～13）。裁くのはメシアである（ヨハネ 5：22、Ⅱテモ 4：1「死んだ人をさばく」）。
- (3) そして、ゲヘナまた火の池へ（黙 20：14～15）。これは、「第二の死」と呼ばれ、永遠の死である。永遠に消滅するのではなく、からだも霊魂も持っていて、永遠に神から分離され、苦しむ場所である。

□補足：サタンと悪霊たち

1. 「大きな白い御座のさばき」では、サタンや悪霊たちも裁かれる。
2. 悪霊たちの中には、アブソスやタルタロスに留置されていた悪霊たちも含まれる。
3. 裁くのはメシアであるが（ヨハネ 5：22）、私たち信者もメシアとともに裁きに加わる（Ⅰコリ 6：3）。
4. 裁かれた後、サタンと悪霊たちは、ゲヘナまた火の池へ。ゲヘナは、本来、サタンと悪霊たちのために用意された場所である（マタ 25：41）。
 - (1) 黙 20：10・・・最終場面。サタンが火の池に投げ込まれる
 - (2) 黙 20：11～15・・・最終場面までに至る経緯説明

死後の世界 第二部 人は死んだら、どこへ行くのか
第2章 復活までの中間的状态

この学び全体のアウトライン

第一部 死とは何か

- 第1章 人の構造
- 第2章 死についての聖書的理解
- 第3章 非物質的部分【靈魂】の不滅

第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

- 第1章 肉体の死後、人の靈魂はどこへ行くのか

- 第2章 復活までの中間的状态

第三部 死者の復活

- 第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】
- 第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】
- 第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】
- 第4章 王国の後【不信者の（第二の）復活、不信者は第二の死へ】

第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

■復活までの中間的状态

1. 死に際して、靈魂は罪の性質から解放される

- (1) II コリ 5:8 「肉体を離れて、主のみもとにいる」

- ① 「肉体を離れる」とは、靈魂が肉体から離れること、すなわち肉体の死のことである。
- ② 信者が死ぬと、直ちに「主のみもと」、すなわち第三の天に靈魂は引きあげられ、神の栄光の中に入れられる。

- (2) II ペテ 1:3~4

- ① 神は、「私たちをご自身の栄光と徳へとお召しになった方」（3節）である。
- ② 「その栄光と徳によって、尊いすばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです」（4節）とあるように、信者の靈魂は、「神のご性質にあずかる者」とされる。
- ③ これは、罪の性質が消去されていることを意味する。

- (3) 信者は、肉体の死のときに、その靈魂の中から罪の性質が消去される。靈魂の他の6つの要素である「霊・魂・心・思考・意志・良心」は、人が創造されたときから持つ本来の構成要素である。信者は6つの要素から成る靈魂に回復される。

2. 死に際して、霊魂は、苦しみから解放される
 - (1) ピリピ 1:21~23 「はるかにまさっている」(23節) → はるかに良い状態
 - (2) 黙 6:9~11 「休んでいなさい」(11節) → 安息の状態
 - (3) 黙 7:16~17 「飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も打つことなく、・・・神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる」
 3. 中間的状態のときには、仮の体はあるのか？
 - (1) ない。必要もない。霊は、肉体がなくとも、意識はあり、活動できる。
 - ① 神・・・「神は霊である」(ヨハネ 4:24)
 - ② 聖霊・・・「風はその思いのままに吹き」(ヨハネ 3:8)
 - ③ 天使・・・「御使いはみな、仕える霊であって・・・」(ヘブ 1:14)
 - (2) II コリ 5:1~5
 - ① 1節「地上の幕屋」=肉体
 - ② 1節「神の下さる建物」、「人の手によらない、天にある永遠の家」=復活の体
 - ③ 3節「裸の状態」・・・中間的状態を指す。体を持たないという意味での「裸」。文字通りの裸ではない。(参考：I サム 28:14「外套を着ておられます」)
 - ④ 4節「天からの住まいを着たい」=復活の体を受けたい
 - ⑤ 5節「このことになう者としてくださった方は神である」。信者の行いによるのではない。
 - ⑥ 5節「神は、その保証として御霊をくださった」
 - (3) 中間的状態にある霊は、どのように見えるのか
 - ① I サム 28:13 「こうごうしい方」→直訳『神のような姿形をした方』
・・・普通の人間ではないが、亡霊でもない。明確な形を持っている。
 - ② I サム 28:14 「年老いた方、外套を着ておられます」・・・サムエルが死んだときのままの外見であった → 中間的状態にある霊魂は、その人が死んだときと同じ外観をしている。
 - ③ ルカ 16:19~23 金持ちが、アブラハムのふところにいた人をラザロとわかったのは、ラザロの霊魂が地上にいたときと同じ外観をしていたからである。
 - ④ ルカ 9:28~36・・・ペテロたちは、イエスとエリヤとモーセが話しているところを目撃した。3人とも同じように見えたが・・・
 - イエスは、まだ死んでいない。地上の体を持っている。
 - エリヤは、死を経ずに天に上げられた。その時点で天上の体=不死の体に変換されている。
 - モーセは死んだ。肉体から離れた霊魂の状態である。3人の中で、中間的状態にあるのは、モーセである。
- 補足** ルカ 9:31 に、「モーセとエリヤは、栄光のうちに現れて」とある。マルコ 9:4 では、「エリヤが、モーセとともに現れ、」とある。この時点で、天から来たのはエリヤである。モーセはまだメシアの復活昇天前であるから、ハデスの中の「アブラハムのふところ」からである。よって、エリヤが天から来たときに栄光のうちに現れ、その中にモーセも伴われたとみられる。

死後の世界 第三部 死者の復活

第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】

第三部 死者の復活 のアウトライン

- | | |
|-----|------------------------------------|
| 第1章 | 教会の携挙【新約時代の信者の復活】 |
| 第2章 | 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】 |
| 第3章 | メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】 |
| 第4章 | 王国の後【不信者の（第二の）復活、不信者は第二の死へ】 |

□死者の復活には、第一の復活と第二の復活とがある。

1. 第一の復活・・・義人たち、すなわち信者たちの復活。メシアの王国が始まる前に完了する。
 - (1) 「第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である」(黙 20:6)。
 - (2) 「この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない」(黙 20:6)。
 - (3) この人々は、メシアの王国を経て、最終的に、新天新地の神の都にて、神と共に住む(黙 21:3)。
2. 第二の復活・・・義人ではない人々、すなわち不信者たちの復活。メシアの王国が終わった後、最後の審判が行われるときに起きる。この人々の行先は、火の池。火の池に行くことは、第二の死とも呼ばれる。そこは、神から永遠に分離される場所。

□復活には、順番がある・・・第一と第二。さらに第一の中でも順番がある

1. I コリ 15:22~23 「キリストによってすべての人が生かされる。しかし、おののおに順番がある。」
 - (1) 「すべての人」：ヨハネ 5:28~29「墓の中にいる者がみな」、「善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」
 - (2) 「おののおに順番がある」：第一と第二、さらに第一の中にも。「順番」と訳されるギリシヤ語は、軍隊用語。部隊単位で定められた行進や戦闘の順序を意味する。よって、第一の復活にあずかる信者たちが全員一斉に復活するというのではなく、おののおが所属する部隊ごとに復活することを示す。
2. 第一の復活の中での順番

ヨナのしるし
(マタイ 12:39)

大患難期の開始=イスラエルと反キリストとの七年契約

反キリストによる世界支配3年半、大患難期の終結=キリストの再臨

 - (1) まず、初穂であるキリスト (I コリ 15:23)
 - (2) 次に、キリストが来られるとき、キリストに属している者 (I コリ 15:23)
 - (3) 大患難期が3年半経過したとき、二人の証人 (黙 11:3~12)
 - (4) 大患難期7年が終わったあと、旧約時代の信者たち(ダニ 12:1~2) 1節「苦難の時」=大患難期、その後、2節「ある者は永遠のいのちに」=復活
 - (5) 大患難期の殉教者たち (黙 20:4~6)

ラザロ (ヨハ 11:1~53)

イスラエルの指導者たちに対するしるし

■教会の携挙【新約時代の信者の復活】・・・第一の復活の中で、2番目の復活

1. 携挙の対象となるのは誰か? 「キリストに属する者」＝教会の信者である。
 - (1) 「キリストに属する」という用語は、教会の信者を意味する。
 - (2) 使徒パウロの書簡の中で、よく使われる次の用語はすべて、教会の信者を指す。
「キリストにある」「イエスにある」「イエス・キリストにある」「キリスト・イエスにある」「彼にある」「その方にある」「主にある」
 - (3) 教会は、「キリストの花嫁」と呼ばれる。これに対して、旧約の信者たちは、「花婿の友人たち」である (ヨハネ 3:29)。
2. 教会に関連する一連の出来事は、結婚の手順の4段階に沿って行われる。
 - (1) 花婿の父親が、花嫁となる女性を選び、花嫁料を払う・・・ヨハ 6:37「父がわたしにお与えになる者」、6:44「父が引き寄せないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできない」、エペソ 5:25「キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた」→花嫁料はメシアの血
 - (2) 花婿が花嫁を迎えに行って、花嫁を連れ帰る
 - ① 花婿は花嫁のための場所を備える。・・・ヨハネ 14:1～3「あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます」
 - ② 花婿の父親が、花嫁を迎える時期を決める。第一段階からは比較的長い時間的間隔がある。・・・マタ 24:36「その日、その時がいつであるかは、父だけが知っておられます」
I ヨハ 3:2
 - ③ 花婿が迎えに来るまで、花嫁は花婿に一度も会わないこともある。
 - ④ 花婿が花嫁を迎えに行って、連れて帰る。・・・I テサ 4:13～18
 - (3) 婚姻の式を行う
 - ① 花嫁を清める。・・・I コリ 3:10～15、II コリ 5:10、黙 19:7b～8
 - ② ごく近親者のみで婚姻の式を行う。・・・黙 19:7「小羊の婚姻の時が来た」
婚姻の式は、天において挙行される。
 - (4) 婚宴を行う
 - ① 婚姻の式には参列していなかった多くの人々が、婚宴には招待される。・・・黙 19:9「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ」
 - 旧約の信者たちと大患難期の殉教者たちが招待客である。
 - バプテスマのヨハネは、旧約時代の最後の預言者である。彼もまた招待客のひとりである。ヨハネ 3:29「花婿の友人」
 - ② 婚宴は通常は7日間続く。・・・婚宴に関する2つのたとえ話 (後記参照)

3. 教会の携挙は、どのように展開されるのか？ 7つの段階 Iテサ 4：16～17
- (1) 主は、ご自身天から下って来られる
 - (2) 号令・・・主イエスが發する号令
 - (3) 御使いのかしらの声・・・主イエスの号令を天使長が複唱する
 - (4) 神のラッパの響き
 - (5) キリストにある死者がまず初めによみがえる
 - (6) 生き残っている信者がたちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられる
 - (7) 空中で主と会う。それ以降は、いつまでも主と共にいることになる。
4. 携挙されるときに信者の体は、どのような体か？
- (1) I コリ 15：52 「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに」
 - ① ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえる＝復活
 - ② 私たち＝生き残っている信者は、(朽ちないものに) 変えられる＝変換
 - (2) I コリ 15：53 今の肉体が「朽ちないもの」を着る、「不死」を着る
 - (3) I コリ 15：42～44・・・「蒔かれる」という表現は、靈魂から離れて眠っていた体がよみがえる、ということを示している。全く別の新しい体が与えられるわけではない。しかし、復活または変換された体は、それまでの肉体とは質的には全く違う体である
 - 朽ちるもの → 朽ちないもの
 - 卑しいもの → 栄光あるもの
 - 弱いもの → 強いもの
 - たましい的なかからだ → 靈的なからだ

イエスの肉体は墓の中で朽ちなかった(詩 16：10、使 2：27、Iテモ 6：16「ただひとり不死を持っておられる方)
 - (4) ユダ 24・・・傷のない(欠陥のない)
 - (5) コロ 1：22・・・聖く、傷なく、非難されるところのない
 - (6) ピリピ 3：20～21 「キリストは、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださる」→メシアの復活後の記事からの類推(全部が信者にもあてはまるかは?)
 - ① マリヤは、声でイエスであるとわかった。→ 声は同じ(ヨハ 20：14～16)
 - ② 外見では、すぐにはわからないが、よく見るとわかる(21：4～7)
 - [注意] エマオ途上の弟子たちの場合は「目がさえぎられていて」(ルカ 24：16)
 - ③ 壁を通り抜けることができる(ヨハ 20：19)
 - ④ 突然姿を消すことができる(ルカ 24：31)
 - ⑤ 本物のからだである。肉や骨がある。さわることは可能である(ルカ 24：39、ヨハ 20：27)
 - ⑥ 食べ物を食することができる(ルカ 24：41～43)
 - (7) Iヨハ 3：2「愛される者たち。私たちは、今すでに神の子です。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」

参考：婚宴に関する2つのたとえ話

1. マタイ 22：1～14 王子のために結婚披露宴を設けた王のたとえ話

- (1) 2節「王」＝父なる神、「王子」＝御子イエス
- (2) 3節「招待しておいたお客」 イエスを十字架にかけた世代のユダヤ人たち
- (3) 7節「兵隊を出して彼らの町を焼きはらった」＝紀元70年、ローマ軍によってエルサレム炎上。
- (4) 9節「大通りに出て行って、出会った者をみな宴会に招きなさい」
 - ① 使徒の働き2章以降の福音宣教は教会形成のための宣教である。教会はキリストの花嫁であって、婚宴に招かれる客ではない。
 - ② 9節の宣教は、大患難期前半期における世界宣教活動をさす。
 - ③ このたとえ話の中心テーマは、イスラエル民族の救いである。紀元1世紀の世代は、3～8節にあるように、「ふさわしくなかった」。それに対して、大患難期の世代は、14節「招待されるものは多いが、選ばれる者は少ない」とあるように多数派ではないが、10節「いっぱいになった」とあるように、少なくない数の人々がメシアを受け入れる。ゼカリヤは、イスラエル民族の3分の1が残ると預言している（ゼカ13：8）。
 - ④ 大患難期を生き延び、かつ霊的にも救いを受けたイスラエル民族は、復活の体ではなく、そのままの体で、メシアの王国に入る。メシアの王国は、小羊の婚宴によって始まる。彼らは、この婚宴の招待客である。同時に、この宴会は、ヤハウェの妻であったイスラエル民族が、離婚状態から再びヤハウェの妻となる祝宴でもある。

2. マタイ 25：1～13 十人の娘のたとえ話

- (1) 1節「花婿が花嫁を連れて戻ってくるのを待つ十人の娘たち」
 - ① 大患難期の末期に、メシアは地上に戻ってくる。このとき、メシアは教会の信者たち（キリストの花嫁）を同行してくる。これが、メシアの再臨である。
 - ② 再臨のときに地上で生き残って人々は、大別すると、イスラエル民族と異邦人とである。
 - イスラエル民族は3分の1までに減っているが、再臨の直前に残った全員が救いを受ける。
 - 異邦人は、信者と不信者とに分けられる。
 - ③ このたとえ話の十人の娘は、信者である5人と不信者である5人とに分けられるので、異邦人である。
 - ④ よって、このたとえ話は、大患難期の異邦人に向けて語られている。
- (2) 5人は「愚か」＝信じない、5人は「賢い」＝信じる
- (3) 愚かな5人は、「油」を用意していなかった」＝**聖霊**を受けていない、新生していない、信者ではない。
- (4) 10節「油を用意していた娘たちは、婚礼の祝宴に行った」＝メシアの王国に入り、小羊の婚宴に招待客として席についた。
- (5) 実際に異邦人を信者と不信者とに分けることについての預言は、マタ25：31～46